

つつじ読書会 ブルガーコフ(1891-1940)『巨匠とマルガリータ』(1966)

山口

近代

編集長(ベルリオーズ)、イワン
ポンティウス・ピラトゥス悪魔たち(ヴォラント)
イエス
巨匠、マルガリータ・ニコラーエヴナ

1.この物語で悪魔たちがなしたことは何か?

●近代への異議申し立て・造反有理(テロリズム)

・「黒魔術とその種明かし」(上) p.241～

ヴェリエテ劇場にて、強欲(偽外貨)と、虚飾(ショーケース)と、虚偽(センプレーヤーロフ)を悪魔たちが暴き立てる。

●近代から排除されたものの復活 2つの復活のエピソード

①精神病院に入っていた巨匠を(マルガリータを介して)解き放つ。

巨匠は、ポンティウス・ピラトゥスを「不幸な人間」だとする物語を描いた。

「あなたが自分の殻に閉じこもりすぎ、人間にたいする信頼を完全に失ってしまったことにあります。だって閣下、そうではありませんか、たかが犬一匹に愛情のすべてを傾けたりしてはいけません。それでは、あなたの人生は貧しいものではありませんか」(上) p.46

「(国家権力を含めた)ありとあらゆる権力は人々にたいする暴力にほかならず、皇帝の権力も、ほかのいかなる権力も存在しなくなる時が訪れるであろう、と。人間はいかなる権力も絶対に必要としない真理と正義の王国に移行することであろう」(上) p.60

一方で、ポンティウス・ピラトゥスは、国家権力によって吊り支えられた法の執行人。権力の行使者。近代は「法」による支配によって形作られているとすると、ポンティウス・ピラトゥスは近代人の象徴と読むことができ、ヨシュアはその近代人を「不幸な人間」だと評している。実際に、ポンティウス・ピラトゥスは不幸にも頭痛に苛まれている。

②マルガリータは近代の「勝ち組」のはずだが、幸福というものを知らなかった。

近代に属しながら、近代の虚妄の只中にいる。このマルガリータに悪魔たちがさせたことは何か?

近代から追いやられた死者(罪を犯した人間)との和解の儀式。

「悪魔の大舞踏会」(下) p.100～

《フリーダ》のエピソード(下) p.113 「青い縁取りのついたハンカチです。それというのも、カフェでウェイトレスとして働いていたころ、あるとき、カフェの主人に無理やり物置に連れこまれましたね。九カ月後に男の子を産み落とすと、その子を森に連れてゆき、口にハンカチを押しこんで、地面に埋めてしまったのです。裁判のときに、赤ん坊を育てられなかったのだと言っていました」

マルガリータは「お前は許される。もうこのさき、ハンカチが置かれることもない」といってフリーダに赦しを与える。(下) p.149

このエピソードが私たちに与える印象は、《フリーダ》の罪は、《フリーダ》自身に帰せられてはならない、という思いだ。《フリーダ》は彼女が陥った境遇によって、罪を犯さざるをえなかった。もちろん、近代の「法」は、この罪を「子殺し=尊属殺人」として重罰に処し、かつ《フリーダ》自身の心にも、拭えない罪責感を与える。が、実際にこの刑を執行したなら、執行する側には“疚しさ”が残り続けるのではないか。この“疚しさ”は、ポンティウス・ピラトゥスを苛む頭痛と同じものだといえる。

そして、この“疚しさ”がどこからもたらされるのかを考えると、おそらくマルガリータが感じたように、「自分自身もまた、《フリーダ》と同じ境遇に陥ったのなら、その罪を犯していたかもしれない」という共感から発せられていた。共感を感じたからこそ、《フリーダ》に赦しを与えたのだといえる。

〔2つのエピソードからみえてくるもの〕

近代には、「赦し」がない。

そして逆説的だけれども、「悪」がない。

悪魔たちがもたらすのは、「悪」と、「悪」がなされてしまったときの「赦し」だったといえる。

(下) p.300～ ヴォランドとマタイの会話

「屋上に姿を現わすなり、愚かな真似をしたが、それがどういうことか言ってやろうか、その話しかたが愚かだというのだ。まるで影を、また悪を認めないようではないか。こういう問題を考えようとはしないのか、もしも悪が存在しないなら、おまえの善はどうなる、もしも地上から影が消えてしまうなら、地球はどういうふうに見えるだろうか？ なにしろ、影は物や人間があつてこそできるものではないか。ほら、ここに剣の影がある。だが、影は樹木や生き物からもできる。さえぎるものとてない光を楽しみたいという空想のために、あらゆる生き物を地上から一掃し、地球全体を丸裸にしてみたいのか？ おまえは愚か者だ。」

ここで問われているのは、悪の反対「善」の問い直しだ。

善がなすべきは、「裁き」ではなく「赦し」だと、悪魔ヴォランドはいつている。そして「赦し」が共感から発せられていたとすると、「裁き」は共感の障碍となってしまう。

2/近代がなおざりにしてきたこと

・信仰・信じる 近代は臆病(p.240 「。。。最大の罪。。。臆病。。。」)になり、信じることができなくなっている。近代における、約束の取りかわし

(上) p.163 出演契約の取りかわし(契約書)

(上) p.202 居住者組合 契約書

レストランのエピソード(下) p.268～ コロヴィエフとベゲモートがレストランを訪れたとき「(作家であることの)証明書は？」とレストランの女にもとめられる。「ところで、ドストエフスキイが作家であることを証明するのに、証明書を持っているかどうかをたずねる必要があるのでしょうか？ドストエフスキイのどの小説でもいいです。どこでも五ページほど読んでみると、証明書なんかなくたって、それが作家の書いたものであることを確信できるでしょう。それに、ドストエフスキイは証明書なんか一枚も持っていなかったはずだ!どう思う？」

これらの契約書は、あらかじめ契約不履行であったときのことが記載されている(はず)。すなわち、契約書は甲乙の信を取りかわすものではなく、甲乙の不信を前提にした書類。臆病な書類。しかし信は本来は、「過ちや失敗することがあるかもしれない、けれど、(にもかかわらず)信じるよ」というときに、信となる。

「わたしたちは悪をおかす、悪をおかすゆえに、悪を"罰する"準備ではなく、悪を"赦す"準備をしておきなさい」これがヨシュアの教え。そしてこれは罰するよりも、途方もなく困難なことなのかもしれない。

【 ルールについて 】

5月の読書会で、提起された「ルール」について、「法の二面性」について、考えてみたい。「人はルール(法)によって自由を得るし、ルール(法)がなければ、どうしてよいかわからない。一方で、ルールは、人(法)をしる側面をもつ」

1.

『巨匠とマルガリータ』は、悪魔たちによる近代の茶化し、つまり近代を形づくる[ルール]の茶化しではじまっている。この作品の[ルール]は、傲慢で偽善的で権力的であったために、悪魔たちはその[ルール]を破壊しにやってきた。その描写はときに滑稽でもあって、痛快でもある。しかし、一方で、どうしても私たちは[ルール]を必要とするのではないか、という危惧を抱く、臆病にも。

2.

近代は、「国」という[ルール]や、「資本」という[ルール]でなりたっていると、まずはいってみる。

そして、次にこれを内藤さんが提起された問いにあてはめる。

●「国」という[ルール]のなかでは、国民は自由を得るし、「国」がなければ、国民はどうしてよいかわからない。

●「資本」という[ルール]のなかで、私たちは自由に取引するし、「資本」がなければ、生活は立ち行かなくなる。

しかし、むしろこの[ルール]が、近代による悪弊となっている。どういうことかということ、[ルール]はわたしたちだけのものではないから。問題は、[ルール]が別の[ルール]と衝突しているところ。あるいは、[ルール]のなかで取りこぼされたものがあるということ。

3.

ロシアとウクライナ、イスラエルとハマスで起こっていることは、[ルール]と[ルール]の衝突だといえるし、斎藤幸平が「資本」という[ルール]を批判するのは、「資本」という[ルール]が、より大きな地球環境という[ルール]と衝突するから。ゆえに、[ルール]に必要なのは、その[ルール]をつくりかえることができることを担保しておくこと、となる。ゆえに(法の法、憲法がある)

4.

ただ、まだ、より根本的な問いは立てられる。

根本的な問いとして、[ルール]がないと、どうしてよいかわからなくなるのだろうか。これは[ルール]による支配のあとから世界をみているために、そのようにみえるだけではないのか?

「国」という[ルール]がなければ、共感は生まれないだろうか。むしろ「国」という[ルール]が共感の妨げとなっていないだろうか。斎藤幸平が「SDGsは大衆のアヘン」だというのは、「SDGs」という[ルール]が、より根本的な「資本」の[ルール]と「自然」の[ルール]との対立をみえなくさせてしまっていることへの批判ではなかったか。

5.

『巨匠とマルガリータ』を読んでみてきたのは、[ルール]に先立って、人間には共感という、お互いの偶然性を慮る能力がある、ということだった(スピノザ、墨子の問題と同じ)。近代は、この能力を不信や臆病ゆえに侮り見くびり、なおざりにしてきたのではなかったか。これを思い出すこと。

マルガリータの赦しの意味

- マルガリータは巨匠を救う選択より前に、フリーダを赦した